

多賀城市文化財調査報告書 第44集

# 市川橋遺跡

— 第18・21次調査報告書 —

平成9年3月

多賀城市教育委員会  
多賀城市建設部道路課

多賀城市文化財調査報告書 第44集

# 市川橋遺跡

— 第18・21次調査報告書 —

## 序

多賀城市は、史跡のまちづくりを推進し、文化財と市民との融合・対話を実践していくようにとの願いをもちながら日々それに邁進しているところであります。近年においては、開発事業や道路整備事業など住環境を充実させていくうえでの工事計画が市内において多くなっており、それに伴い発掘調査の件数も増加しているのが現状です。そのような状況の中で、市民共有の財産である文化財をよりよく保護・活用していくためには、史跡の保存・管理、そして、発掘調査の実施を通じて、そのすべてをバランスよく行っていくことが必要であると考えます。また、そのことが「史跡のまち」を作り上げていくことへの基本になるとを考えます。

さて、今回発掘調査が実施された市川橋遺跡樋ノ口地区についても、道路整備事業の一環である市道新田・高崎線樋の口橋架換工事に伴うもので、平成7年に引き続き2カ年の継続事業として実施されたものであります。発見された遺構、遺物には平安時代頃の堅穴住居跡、溝跡などがあり、多賀城跡を取り巻く土地利用を研究する上で貴重な資料となるものと思います。最後に、本報告書が文化財関係者のみならず、多少なりとも市民の皆様の文化財に対する普及・啓蒙の一助となれば幸いです。

平成9年3月

多賀城市教育委員会

教育長 櫻井茂男

## 例　言

1. 本書は平成7・8年度に実施した市川橋遺跡第18次調査と第21次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構番号は第1次調査からの一連の番号である。
3. 本書で使用した遺構の分類記号は次の通りである。  
S B : 捩立柱建物 S D : 清 S E : 井戸 S I : 窓穴住居 S K : 土壙 S X : その他
4. 調査区の実測基準線は「平面直角座標系X」を使用し、原点X = -189635.000、Y = 14090.000を通る南北方向の直線を南北基準線、これと直交する東西方向の直線を東西基準線とした。これら両基準線の交点を原点0として調査区内に3mの方眼を組み、東西方向は原点から東をE、西をWとして原点から1m離れるごとにアラビア数字で、E 1・E 2・E 3・…、W 1・W 2・W 3・…と表した。南北方向は北をN、南をSとして同様に表した。
5. 掘団中の高さは標高値を示している。
6. 土色は『新版標準土色帳』(小山・竹原:1993)を参照した。
7. 第18次調査で出土した墨書き器については平川 南氏(国立歴史民俗博物館教授)より、また第21次調査で出土した石製品(丸瓶)の石材については、蟹澤聰史氏(東北大学理学部教授)よりご教示いただいた。
8. 本書の執筆は、A区を伊藤 浩、B区を高橋圭藏・伊藤が協議し、C区を高橋が行った。
9. 遺物整理及び実測図作成等の作業については、柏倉霧代、陶山暮美栄、村上和恵、大山真由美、赤坂菜緒子、秋本佳代、太田久美子、菅野礼子、細野志乃、渡邊奈緒の協力を得た。
10. 調査・整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市教育委員会が一括して保管している。
11. 本書と他の発表資料とで見解が異なる場合は、本書の記述内容が優先するものである。

## 調査要項

1. 遺跡名：市川橋遺跡（遺跡番号18008）
2. 遺跡所在地：宮城県多賀城市高崎字樋ノ口地内
3. 調査期間：第18次調査：平成7年6月19日～8月31日  
：第21次調査：平成8年6月14日～9月13日
4. 調査面積：第18次調査：1,234m<sup>2</sup> （対象面積4,590m<sup>2</sup>）  
第21次調査：1,230m<sup>2</sup> （対象面積1,600m<sup>2</sup>）
5. 調査主体者：多賀城市教育委員会 教育長 塚井茂男
6. 調査担当者：多賀城市埋蔵文化財調査センター
  - 第18次調査 所長 烏山文夫
  - 第21次調査 所長 木村忠雄
  - 第18次調査 調査員 濑口 卓 伊藤 浩
  - 第21次調査 調査員 高橋圭藏 伊藤 浩
7. 調査参加者：
  - 第18次調査：赤井ひろこ 加藤昭一 苛野文夫 今野和子 笹井希美枝 佐々木欣哉 田中ミヨ  
田中裕子 星 光治 星 秀雄 松岡美津枝 三浦あさ子 宮川ハルミ 山田吉之助
  - 第21次調査：赤井ひろこ 赤間かつこ 浅野 真 阿部抱吉 阿部敏子 阿部美智子 安藤美喜子  
内海義雄 遠藤一代 大河原政夫 太田恂一郎 大山貞子 小笠原マキ子 長田栄太郎  
小野寺恵子 苛野恵子 熊谷あつ子 熊谷きみ江 熊谷サツキ 小松吉男 今野和子  
後藤恵子 櫻井エイ子 櫻井くに子 佐々木欣也 佐々木軍治 下道博信 苛原吉明  
鈴木寿二 高野敏子 武田みつ子 武田リキ 田中ミヨ 田中裕子 大道寺 勉  
千葉亨一 角田静子 橋本 務 早坂 刚 福永孝二 松岡美津枝 松本喜一  
真野勝雄 宮川ハルミ 山田園子 山田弘子 渡辺幹子

# 本文目次

序文

例言

調査要項

本文目次

I. 市川橋遺跡の立地と環境 .....	1
II. 調査に至る経緯 .....	1
III. 調査方法と経過 .....	2
IV. 調査成果 .....	7
1. 基本層序 .....	7
2. A 地区 .....	7
(1) 溝 .....	7
(2) 小    溝 .....	8
(3) 井    戸 .....	9
(4) 遺構以外から出土した遺物 .....	9
3. 第 1 トレンチ .....	10
4. 第 8 トレンチ .....	10
5. B 地区 .....	14
(1) 堅穴住居 .....	14
(2) 溝 .....	15
(3) 土    壌 .....	17
(4) そ    の    他 .....	18
(5) 遺構以外から出土した遺物 .....	19
(6) 遺構一覧表 .....	20
6. C 地区 .....	27
掘立柱建物 .....	27
V. まとめ .....	28
VI. プラントオパール分析 .....	30
写真図版 .....	31

## I. 市川橋遺跡の立地と環境

多賀城市は、宮城県のほぼ中央部に位置する仙台市の北東約10kmにある。市川橋遺跡は、多賀城市のほぼ中央部に位置し、市の中央よりやや西側を南北に流れる砂押川によって形成された標高2~3mの微高地から低湿地に立地している。本遺跡は北側で丘陵に接するように、東西1.4km、南北1.6kmに渡って広がっている。今回調査を行った場所は市川橋遺跡の南端部にあたる。この場所は砂押川から丘陵である高崎地区に移行している低湿地から微高地にかけてである。現在は水田として利用されているが、宅地化が急速に進められている場所もある。

市川橋遺跡では、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物がこれまでの調査で発見されている。(第3図)特に平安時代を中心とする遺跡であることが知られており、市川字伏石地区や館前地区、鴻ノ泡地区などでは道路や掘立柱建物、塹穴住居が、高平地区では水田が見つかっている。

本遺跡の周辺には、特別史跡多賀城跡があり、多賀城の付属寺院である多賀城廃寺が東側の丘陵に所在している。廃寺跡を取り巻くように高崎遺跡があり、西側の自然堤防上にある山王遺跡が本遺跡と接している。本遺跡を含めたこれらの遺跡は、古代多賀城と関連のある遺跡として重要視されている。

## II. 調査に至る経緯

多賀城市では、近年本市自体の都市化や隣接する仙台市からの住宅需要の高まりによって、市街地の拡大が急速に進んでいる。この傾向は、本市西部地区において顕著であり、本遺跡が所在する高崎地区でも宅地開発や幹線道路の整備など、新たな土地利用が徐々に進んでいる現状にある。

さて、本調査については、市川橋遺跡の範囲の南東部に位置する高崎字櫛ノ口地内における市道新田高崎線櫛の口橋架換工事計画がその契機になっており、多賀城市道路課と教育委員会が事前に協議を行い、発掘調査を実施するに至ったものである。当該地は、主に水田として利用されており、隣接地においては、平成3年度の発掘調査(高崎遺跡第8次調査)で、掘立柱建物、溝、道路、水田等が発見されている。このことから、遺構が当該地にも及んでいることがほぼ確実なものと判断され、平成7年度より2ヵ年計画で発掘調査を行うこととした。平成7年6月から8月にかけて行った初年度の第18次調査では、A地区とした調査区西側の平坦面を調査し、調査区中央部のB地区においても遺構確認調査を行い、それにおいて遺構が存在することを確認した。調査2年目にあたる今年度の第21次調査は、B地区と市道に面し丘陵部である調査区東側のC地区の事前調査を実施したものである。



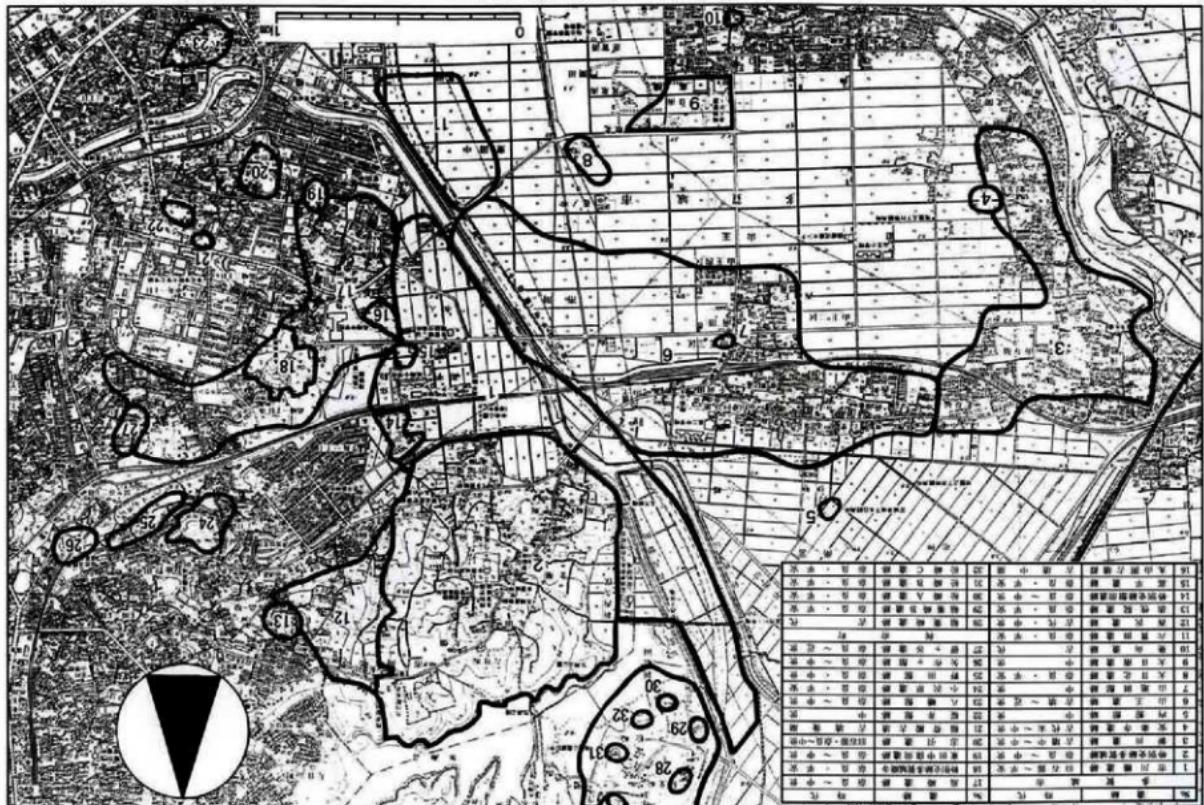
### III. 調査方法と経過

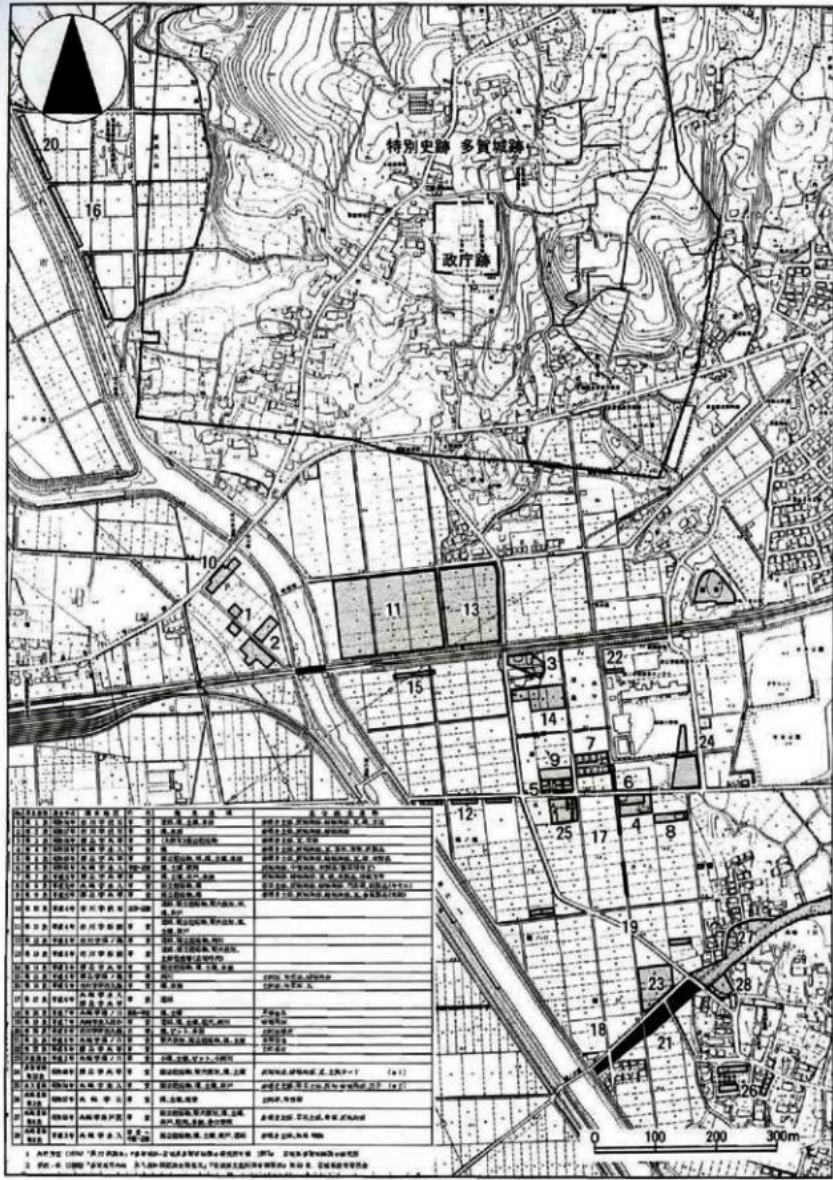
市川橋遺跡第18次調査は、平成7年6月19日より開始された。遺構の確認を行うため8本のトレーンチを設定した。その結果、第1・第8トレーンチでは遺構を発見できず平面図・断面図作成後直ちに埋め戻した。第2～第7トレーンチでは地山面で溝や土壤を確認できたので同様の図面を作成し、第2～第4トレーンチに再度重機を導入して、遺構を確認した範囲に限定して地山面までの表土・堆積層を除去した。この調査区をA区として、7月21日より排水溝を掘り、遺構検出を始めた。各トレーンチの図面作成を終えた後、A区と並行して第5～第7トレーンチの範囲をB区とし、7月25日に重機を入れて西側半分についてのみ表土剥ぎを行い、7月26日からは遺構の検出作業に入った。A区においては地山面で井戸1基、溝多数を発見し、7月31日から掘り下げを開始した。掘り終えた遺構から写真撮影を行い、図面を作成した。8月23日に遺構の掘り下げを全て終了し、A区の全景写真を撮影した。8月29日に重機による埋め戻しを行い、A区の調査を完了した。8月22日には、体験学習ということで多賀城市立八幡小学校6年生の児童二十数名が発掘作業を行った。8月24日より中断していたB区西側の調査を再開した。B区西側の西端と東端にはL-I層が広がっており、このL-I層に挟まれる地山面で土壤5基と溝多数を発見した。掘り終えた遺構から図面を作成した。8月31日に今年度の発掘調査を終了した。

第21次調査は、平成8年6月14日に開始された。プレハブ周辺の草刈りなどの環境整備を行った後、B区西側半分については、昨年度に表土剥ぎを終えていたので、6月19日から遺構検出に取りかかった。6月27日、遺構を検出した状況で調査区西側の全景写真を撮り、平面図を作成しながら遺構の掘り下げを始めた。遺構のほとんどが溝で、厚さ5cm前後の埋土しか残っていないほど残存状態が悪く、遺物も小破片が数点出土する程度だった。7月31日、遺構の掘り下げもほぼ完了し、調査区西側の全景写真を撮影した。また、調査地域の中で東端にあたる部分をC区として調査を行った。7月17日より重機による表土剥ぎを行ったが、調査区内については、全面に約1.5m～1.7mほど盛土がありそれを除去することで、地山面を確認した。7月25日より遺構検出作業に入り、遺構として掘立柱建物跡1棟を検出した。その後、柱穴の断ち割りを行い、図面作成に入った。柱穴を完掘後、全景写真撮影を行い7月31日に調査を完了した。調査完了後、工事及び安全面等を考慮して、8月5日より重機による埋め戻しを行った。8月2日、B区西側では残った断面図・平面図の作成と並行して、作業員による遺構の埋め戻しを行う。8月6日から9日にかけて、重機をもじいてB区東側のめぐり返しを行い、8月9日から遺構検出を並行して行う。B区東側も西端と東端にL-I層が広がっており、両側のL-I層に挟まれた地山面に遺構を確認することができた。8月12日から16日の間、発掘作業はお盆休みに入る。8月19日より発掘作業を再開したが、お盆休み中に調査区周辺の水田に水が張られ、その影響で調査区の大半が水没してしまい、常時ポンプを稼働させて発掘を進めた。まず、L-I層を掘り込んでいるSD-641を完掘してから、L-I層の除去に取りかかった。それと並行して、地山面の遺構の掘り下げを行い平面図を作成した。9月2日、調査区北壁の一部を拡張して堅穴住居S I-752の全体を確認し、5日から十字ベルトを設定して掘り下げた。9月13日、数名の作業員に残った遺構の掘り下げや図面の作成を行ってもらいながら、これと並行して器材の搬出を行った。また、プラントオバール用土壤サンプリングを行い全ての調査を終了した。

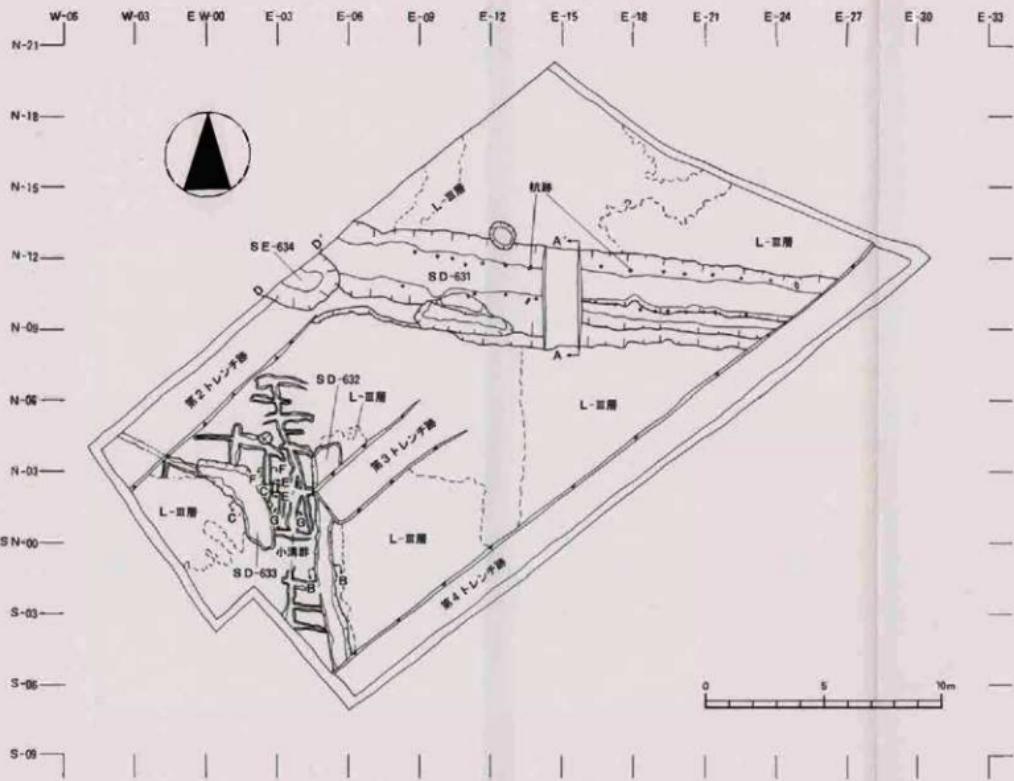
圖乙 國華縣分佈圖

63





第3図 調査区位置図



## IV. 調査成績

### 1. 基本層序

L-I層：表土、及び、現代の水田床土である。厚さ10~20cmで、調査区全体に広がる。酸化鉄が多く含まれている。

L-II層：にぶい黄褐色(10YR 4/8)から黒褐色(10YR 3/1)のシルト質土で、少量ではあるが10世紀前半に降下した灰白色火山灰を斑状に含んでいる。厚さ5~10cmで、A区では調査区のほぼ全体に広がり、遺構を直接覆っている。B区では、調査区の南東部分でごく薄く確認できるだけである。

L-III層：褐色(10YR 4/1)の粘質土で粘性が強い。A区およびB区で確認された厚さは10~20cm程度である。L-II層によって直接覆われている。

### 2. A地区

A区で発見した遺構には、溝3条、小溝16条、井戸1基がある。ここでは、主な遺構と出土遺物についての説明を行い、その後に堆積層出土の遺物について記述していく。

#### (1) 溝

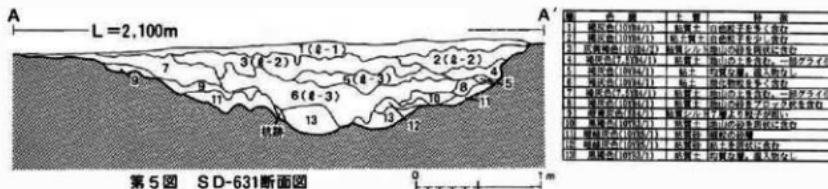
##### 1. SD-631

調査区中央部で発見した東西溝でL-III層を掘り込んでいる。西で北に約5度傾く。SE-634と重複しており、これよりも古い。東西両端とも調査区外に延びており、確認できた長さは約22mである。規模は、上幅3.4~4.35m、底面幅1.15~1.3m、深さ53~71cmである。断面の形状は、底面から緩やかに立ち上がるが、南壁には段がつく。底面の両壁ぎわでは、杭跡を検出した。北側で15基、南側で16基を数える。杭跡の直径は約10cm、杭の間隔は狭い所で50~60cm、広い所では120~140cmあり、等間隔に並んでいる。溝の壁が砂層のため発掘している最中でも崩れてくることがあり、土留めに利用していたと考える。埋土についてみると、第6層には炭化物が多く含まれ、第12層には木屑が含まれていた。壁ぎわの埋土に地山ブロックが入っていることを除けば、ほかの層に混入物は見当たらない。

遺物は、土師器杯・大型甕・小型甕・須恵器杯・甕が出土した。第11図5は須恵器杯で、体部外面に墨書き「市」が書かれている。底部は回転ヘラ切りで切り離されており、胎土中に海綿骨針を少量含んでいる。第11図6、9、10は土師器小型甕である。口径と器高はほとんど同じで、体部上半部に最大径がある。体部の調整は摩耗が激しく判りにくい。ロクロを使用せずに作られており、底部には木葉痕が観察できる。また、胎土中に多くの海綿骨針が含まれている。6の小型甕には頭部から体部にかけて工具痕を観察することができる。第11図7は土師器大型甕の口縁部から体部にかけての資料である。口径が器高より小さく、かつ最大径が口縁にあり長胴形をなしている。頭部は「く」の字形に鋭く外反する。自然遺物ではクルミが出土している。

##### 2. SD-632

調査区南西部で発見した南北溝で、L-III層を掘り込んでいる。北で西に約4度傾く。小溝群と重複しており、これらよりも新しい。溝の南端は第4トレンチによって壊されており、調査区の外に延びている



第5図 SD-631断面図

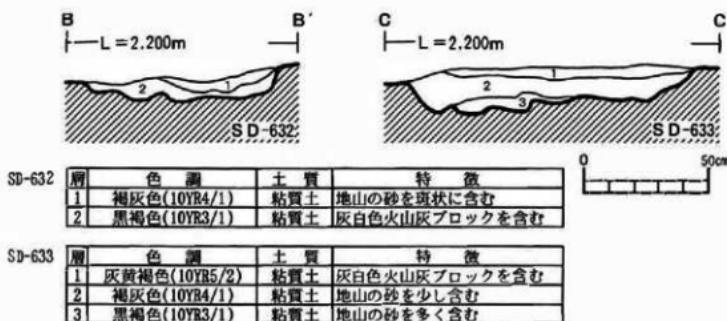
かは不明である。確認できた長さは9.9mである。規模は、上幅60~125cm、底面幅45~105cm、深さは8~9cmである。断面は、やや凹凸がみられる底面から緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に分けられ、下層には灰白色火山灰がブロック状に含まれていた。

遺物には、土師器杯・甕がある。第11図11は土師器杯で、内面は横方向にヘラミガキが施され、体部下半部から底部にかけて回転ヘラケズリされている。自然遺物では草食動物の歯が出土している。

### 3. SD-633

調査区西部で発見した南北溝で、L-III層から掘り込んでいる。小溝群と重複しており、これらよりも新しい。本溝は、大きく湾曲している。規模は、長さ約5.2m、上幅50~120cm、底面幅40~90cm、深さ5~20cmである。断面の形状は、凹凸にとむ底面から緩やかに立ち上がっている。埋土は、3層に分けることができ、第1層には灰白色火山灰がブロック状に含まれていた。

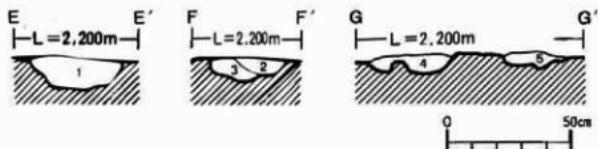
遺物は、須恵器の体部破片、円盤状製品（第11図12）が第1層から出土した。



第6図 S D - 6 3 2 . 6 3 3 断面図

### (2) 小溝

調査区西部の地山面で16条の小溝を検出した。東西小溝が10条、南北小溝は6条あり、両方向の小溝はほぼ直交するように走っている。SD-632・633と重複しており、これらよりも古い。小溝同士の切り合ひは確認できなかった。規模は、上幅20~60cm、底面幅15~50cm、深さ1~10cmである。小溝間の間隔は、東西溝で約65~75cm、南北溝で約55~65cmと比較的等間隔に並んでいる。断面の形状は、やや凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる皿状をしている。遺物は出土していない。



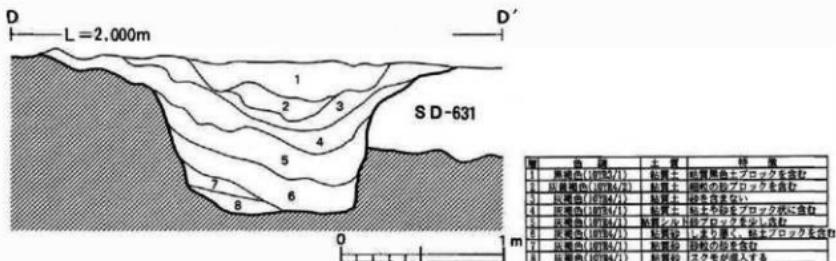
層位	色調	土質	特徴
1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	地山の砂を斑状に含む
2	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	地山の砂を斑状に含む
3	褐灰色 (10YR4/1)	粘質土	地山の土を含む
4	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	地山の砂を斑状に含む
5	黒褐色 (10YR3/1)	粘質土	地山の砂を斑状に含む

第7図 小溝群断面図

### (3) 井戸

SE-634

調査区西壁で発見した井戸で、地山面から掘り込んでいた。SD-631と重複しており、これよりも新しい。西半部は調査区外にあるため明確ではないが、平面形は椭円形になると思われる。規模は径約2.5m、深さ1~1.2mである。断面の形状は、ほぼ平坦な底面より急に立ち上がり逆台形をなすが、上面付近では大きく開く。埋土は、地山の砂や粘質黒色土がブロック状に混入する粘質土層（第1・2層）と、ブロックを含まない粘質土層（第3~5層）、砂層（第6~8層）に分けることができ、第1・2層は人為的に埋め戻された様相を示している。遺物は出土していない。



第8図 S E - 6 3 4 断面図

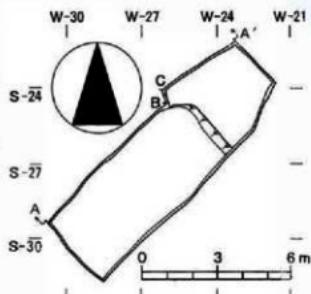
### (4) 遺構以外から出土した遺物

A区の堆積層からは、土師器杯・高台杯・小型壺・壺・須恵器杯・壺・壺・中世陶器が出土している。そのうち図化できたものは4点（第11図1・2・3・4）である。第11図2・3はL-I層出土の須恵器杯の底部破片で、前者は回転糸切りによって、後者は回転ヘラ切りによって切り離されている。両杯とも底部にヘラ描き「一」がされている。

### 3. 第1トレンチ (第9図)

調査対象地の西端に長さ10.4m、幅3.2mで設定した。本トレンチでは遺構は発見できなかった。

遺物は、土師器杯、須恵器壺が出土している。第11図13は須恵器壺の口縁部破片資料で、内面と口縁部先端に自然釉が残っており、外面には釉が剥離した痕跡を観察することができる。

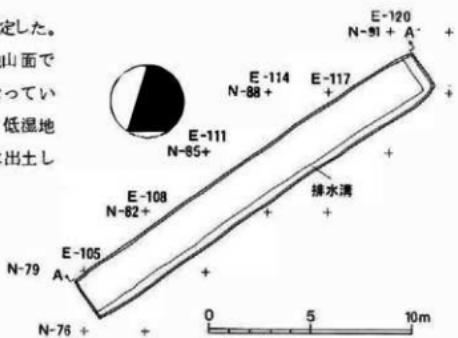


層位	色 調	土 質	特 徴
1	オリーブ灰 (ST 3/1)	粘質土	酸化鉄を斑状に含む
2	オリーブ褐 (ST 4/3)	シルト質粘土	オリーブの砂を多く含む
3	褐 褐 (2.5Y 3/1)	砂 質	褐色の砂や黒色土を多く含む



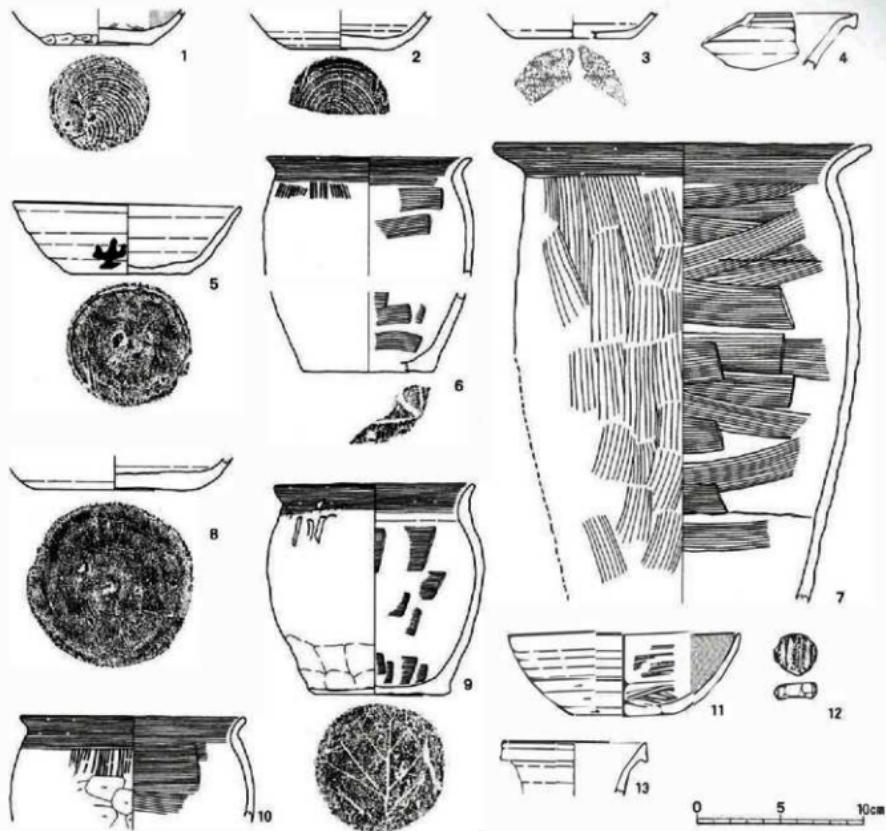
### 4. 第8トレンチ (第10図)

調査対象地の東端に長さ20m、幅2.3mで設定した。このトレンチで遺構は発見できなかった。地山面での標高は約2.3mで、A区よりも40cm程高くなっている。土層堆積もA・B区とは異なっており、低湿地から微高地に変わったことがわかる。遺物は出土しなかった。



層位	色 調	土 質	特 徴
1	暗オリーブ灰 (2.5GY 4/1)	粘土質シルト	しまりが鋭く、グライ化する
2	オリーブ灰 (ST 3/1)	粘土質シルト	褐色粘土質シルトが混入する

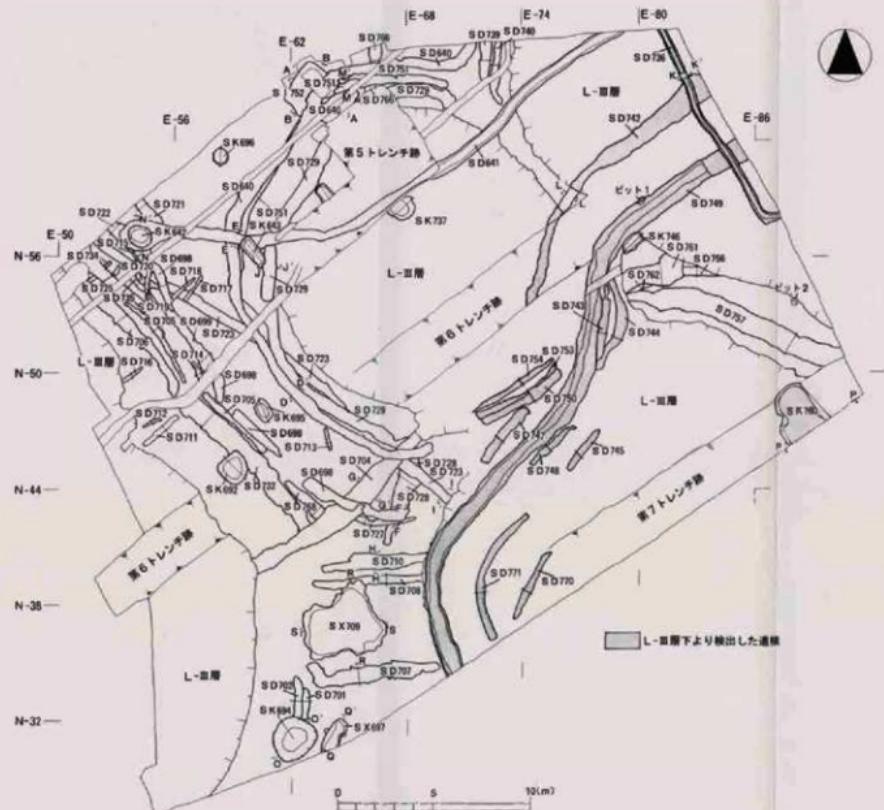




第11図 A地区出土遺物

単位: cm ( )は推定値

No.	南面	北面	東面	西面	縦面	横面	底面	壁厚	器形名	器形No.
1	土師器・杯	A 区	L-S	(外) 手持ちヘラケズリ (内) ヘラケズリ、白色地質 (底) 回転条切口、無底盤				6.8	R-21	
2	須恵器・杯	A 区	L-S	(外・内) ロクロナダ (底) 回転条切口、手持き				(6.8)	R-25	
3	須恵器・杯	A 区	L-S	(外・内) ロクロナダ (底) 回転ヘラ切り、手持き				R-23		
4	須恵器・盤	A 区	L-S	(外・内) ロクロナダ				R-72		
5	須恵器・杯	SD-631	S-1	(外) ロクロナダ、曲輪口 (内) ロクロナダ (底) 回転ヘラ切り	直線骨折	13.7	7.8	4.0	R-3	6-4
6	土師器・小鉢盤	SD-631	E-2	(外) ヨコナダ、ハケテ (内) ヨコナダ、ヘラナダ (底面凹)	直線骨折	(12.1)	(7.8)		R-19	
7	土師器・盤	SD-631	E-3	(外) ヤダ?→ヨコナダ (内) ヘラナダ→ヨコナダ		22.9			R-1	6-1
8	須恵器・杯	SD-631	E-3	(外・内) ヨコナダ (底) 回転ヘラ切り?→手持きヘラケズリ				9.8	R-29	6-2
9	土師器・小鉢盤	SD-631	E-3	(外) ヨコナダ、ナダシク、丁目折あり (内) ヨコナダ、ヘラナダ (底) 水痕有り	直線骨折	12.1	7.9	12.6	R-2	6-2
10	土師器・小鉢盤	SD-631	E-3	(外) ハマヘヨコナダ、手持きヘラケズリ (内) ヘラナダ→ヨコナダ	直線骨折				R-31	
11	土師器・杯	SD-632	E-1	(外) ロクロナダ、体幅下狭へ底扁 (内) 回転ヘラケズリ (内) ヘラケズリ→ヨコナダ				14.0 (6.4)	5.9	R-20
12	円錐形土器	SD-633	E-1	(外) 圓錐形引き口、底部斜削を軸用						
13	須恵器・盤	SD-634	L-1	(外・内) ヨクロナダ、白色地質有る				(8.8)		



第12区 B 区 全 体 通 情 四

## 5. B地区

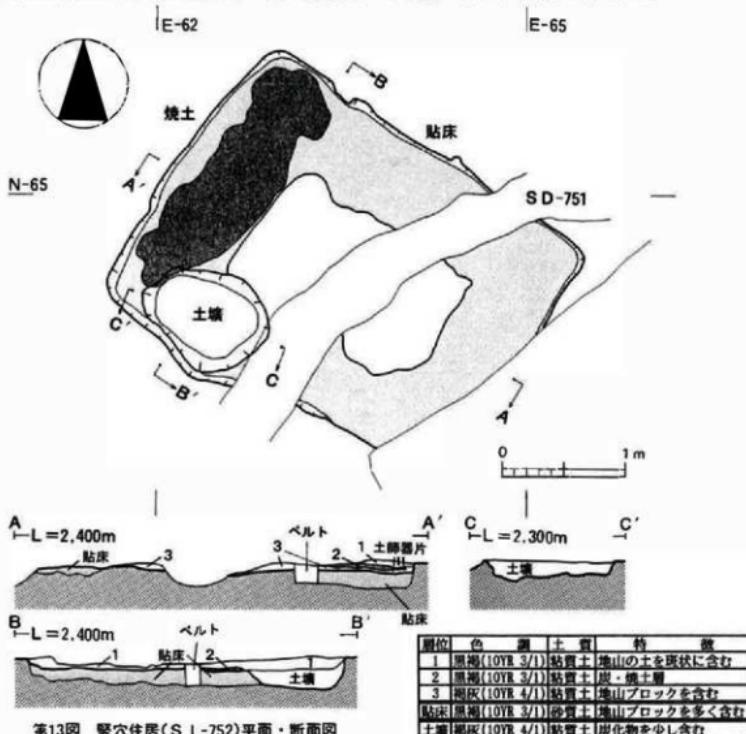
B区で発見した遺構には、竪穴住居1棟、溝57条、土壙10基、ピット2基がある。ここでは主な遺構の説明を行うことにして、その後で、堆積土出土の遺物について記述する。記述できなかった遺構については一覧表の形式でその概要を掲載しておいた。

### (1) 竪穴住居

S I -752

調査区南端の地山面で検出した。平面形は東西に長い隅丸長方形で、長辺約3.0m、短辺約2.3m、壁高は北西壁で約10cmである。住居の方向は北西壁についてみれば、北で東に約35度傾いている。SD-640・751と重複し、これらよりも古い。住居の残存状況は悪く、住居の北西部にのみ埋土が残っており、南東部では貼床が露出していた。カマドと主柱穴を発見することはできず、住居内施設として土壙1基を住居の南西隅において発見した。平面形は梢円形をしている。規模は、長軸約1.1m、短軸約0.82m、深さ10~15cmである。

遺物は、竪穴住居からは土師器杯・甕、須恵器杯が、土壙からは土師器甕が出土した。



第13図 竪穴住居(S I -752)平面・断面図

## (2) 溝

### 1. SD-640

調査区中央の地山面で検出した。この溝は西にふくらんで弧を描くように南北方向に走っている。溝の東端は調査区外に延びているため、検出できた長さは約35mである。規模については上幅35~70cm、底面幅20~40cmで、深さは5~12cmになる。SD-641・704・723・729・751・766、SK-643・SI-752と重複し、SD-641・SK-643より古く、これら以外よりも新しい。断面は、やや凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる。埋土には、褐色の粘質土に灰白色火山灰のブロックが含まれている。

遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯、平瓦、丸瓦、鐵滓がある。小破片で図示できなかったが、凸面をクロナデした第II類（注1）の丸瓦も出土している。

### 2. SD-641

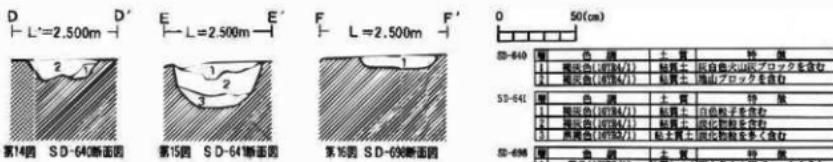
調査区の北部で地山面と第III層を掘り込んでいる東西溝である。本溝の東半部は、東で北に約40度折れ曲がり、調査区外に延びている。検出した長さは約27.2mである。規模は、上幅55~65cm、底面幅32~45cm、深さ25~40cmである。SD-640・729・751、SK-643、SX-693と重複しており、SK-643よりも古く、これ以外よりも新しい。SK-642とも重複しているが、新旧関係は不明である。断面は、平坦な底面から垂直に立ち上がり、「U」字形をしている。埋土は3層に分けることができ、下層になるほど炭化物粒が多く含まれている。ブロック状の土が混入していないことから、自然堆積したと考える。

遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯、赤焼き土器杯、羽口片、鐵滓が、自然遺物には、モモの種子がある。

### 3. SD-698

調査区中央部の地山面で検出した南北溝である。SD-640と並行するように、南から東へ西にふくらむ弧を描いて走っている。溝の北端は調査区外に延びているため、検出できた長さは約22.5mである。規模は、上幅約70cm、底面幅約65cm、深さ約2~10cmである。SD-699・703・704・719・723・727・728、SK-642と重複しており、SD-719よりも古く、これら以外よりも新しい。断面は、平坦な底面より緩やかに立ち上がり、浅い皿状をしている。埋土は1層で、黒色粘質土に灰白色火山灰がブロック状に含まれている。

遺物には、底部が回転糸切り調製を行った土師器杯・甕、須恵器杯・甕がある。



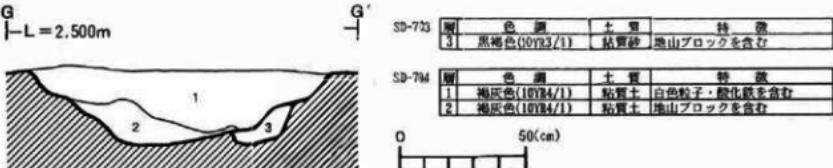
### 4. SD-704

調査区中央部で地山を掘り込んでいる東西溝で、東で北に約40度傾く。本溝は、SD-704によって大部分が破壊されているため本来の規模は不明であるが、検出した長さは約4.5m、上幅35~50cm、底面幅は10~15cm、深さ約16cmである。SD-704と重複しており、これよりも古い。断面は、平坦な底面から急に立ち上がり、逆台形をしている。SD-704に焼かれて残った埋土は1層で、黒褐色の粘質砂が堆積している。遺物は出土していない。

### 5. SD-704

調査区中央部の地山面で検出した東西溝で、東で北に約40度傾く。本溝の両端部はL-I層が広がっている。検出した長さは約12m、上幅55~120cm、底面幅30~50cm、深さ10~30cmである。SD-640・698・703・723・727・729・732・751・768と重複しており、SD-640・698より古く、これら以外よりも新しい。断面は、やや平坦な底面から緩やかに立ち上がり、開いた逆台形をしている。埋土は褐色粘質土で2層に分けられ、下層は地山の砂ブロックが混入して、人為的堆積の様相を示している。

遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、円盤状土製品がある。第30図11は須恵器杯で底部に「十」がヘラ描きされている。第30図9は土師器甕の口縁部片で、口縁に横ナデ調整を行い、外面に4つの段を作り出している。



第17図 SD-703 と SD-704 断面図

### 6. SD-710

調査区南部の地山面で検出した東西溝で、東で北に約5度傾く。溝の東端はL-I層、SD-749によって壊されているため検出できた長さは約5.5m、上幅40~80cm、底面幅25~50cm、深さ5~13cmである。SD-749と重複しており、これよりも古い。断面は、凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる。

遺物には、土師器甕、須恵器杯・甕、羽口、鐵滓がある。第30図14は須恵器杯の口縁部破片であるが、先端部の厚みが体部よりも半分ほどになり段が付いているように見える。小破片のために、この段が口縁部を一周しているものなのか、それとも製作過程でこの部分にだけ段のように付いてしまったものか判断できない。L-I層からも小破片ではあるが、同様の遺物が出土している（第30図3）。

### 7. SD-723

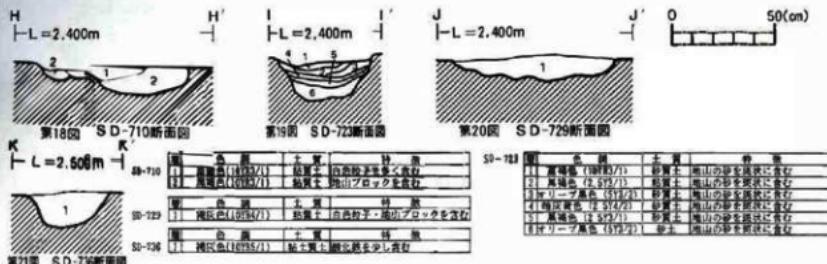
調査区中央の地山面で検出した南北溝で、北で西に約35度傾く。溝の北端は調査区外に延び、南端はL-I層に壊されているため、検出できたのは長さ約22.7m、上幅45~55cm、底面幅20~30cm、深さ10~30cmである。SD-640・698・704・717・718・719・725・728・729・751と重複しており、いずれよりも古い。断面は、平坦な底面より急に内反して立ち上がり、「U」字形をしている。遺物には、土師器片がある。

### 8. SD-729

調査区中央の地山面で検出した。SD-640と同様に西にふくらみ弧を描くように南から東に走っている。溝の南端はSD-704によって壊されており、検出できた規模は、長さ約27.7m、上幅60~75cm、底面幅45~55cm、深さ3~15cmである。SD-640・641・704・723・751、SK-643、SX-693と重複しており、SD-723よりも新しく、これ以外の遺構よりも古い。断面は、ほぼ平坦な底面より緩やかに立ち上がり皿状をしている。遺物には、土師器甕・須恵器杯がある。

### 9. SD-736

調査区東端の地山面で検出した南北溝である。方向は、北で西に約25度傾き、南端は「L」字状に90度



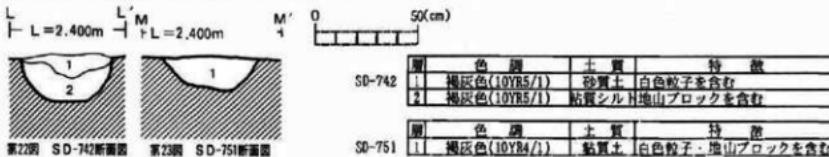
東に折れている。溝の両端は調査区外に延びており、検出できた規模は、長さ約11.7m、上幅約40cm、底面幅15~20cm、深さ10cmである。SD-742・749と重複しており、これらよりも新しい。断面は、やや平坦な底面より急に立ち上がり、逆台形をしている。埋土は1層で、しまりの悪い褐色の粘土質土が自然堆積している。遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯がある。

## 10. SD-742

調査区北東の地山面で検出した南北溝で、両端はI-I'層に覆われている。方向は、北で東に約15度傾く。溝の東端は調査区外に延び、西端は第6トレーンによって壊されていたため、わずかの底面部分しか検出できなかった。検出できた規模は、長さ約14.6m、上幅0.5~1.5m、底面幅20~40cm、深さ25~30cmで、東端部へいくほど上幅が広がっていく。SD-741・772と重複し、SD-741よりも新しい。SD-772との新旧関係は把握できなかった。断面は、平坦な底面から緩やかに立ち上がるが、半分ほどのところで屈曲して垂直になり、椀状をしている。埋土については、地山面で検出した部分では、褐色の砂質土と粘質シルトの2層に分けられるが、I-I'層下で検出した部分は黒褐色の粘土質土が堆積しており、粘性の強い埋土に変化している。出土遺物はない。

## 11. SD-751

調査区中央部の地山面で検出した溝で、SD-640と同様に南から東へ弧を描くように走っている。規模は、長さ約31.5m、上幅約50cm、底面幅20~30cm、深さ約10cmである。SD-640・641・704・723・729・766、SI-752と重複関係をもち、SD-640・641・704よりも古く、これらよりも新しい。断面は、平坦な底面から緩やかに立ち上がり、逆台形をしている。埋土は1層で、褐色の粘土質土が堆積している。遺物には、土師器甕・須恵器杯、鉄滓がある。



## (3) 土 壤

### 1. SK-642

調査区の北東端で地山面を掘り込んでいる。平面形は梢円形をしており、長径1.8m以上、短径1.53m、深さ約50cmになる。SD-698、SD-715、SD-721、SD-722と重複しており、これらよりも新しい。SD-641とも重複しているが、新旧関係は不明である。断面は、やや平坦な底面より緩やかに内反して立

ち上がる。埋土は3層に大別でき、最下層は若干黒褐色粘土と地山の砂が入り混じった層をしているが、いずれも自然堆積と考える。遺物には、土師器杯がある。

## 2. SK-694

調査区南西端の地山面で検出した。平面形は歪んだ円形をしており、半径2.25m、深さ約75cmである。SD-701・702・731と重複しており、これらよりも新しい。断面は、ほぼ平坦な底面より急に立ち上がり逆台形をしているが、途中から緩やかに開いていく。埋土は2層で、上層は褐灰色の粘土質土に地山の土がブロック状に入り、人為的埋土の様相を示す。遺物には中世陶器甕がある。

## 3. SK-760

調査区南東端でL-I層下の地山面で検出した。土壤の南端は調査区外に広がっている。平面形は梢円形をしていると思われ、長軸3.4m以上、短軸約2.7m、深さ約25cmである。断面は、平坦な底面から緩やかに立ち上がり、皿状をしている。遺物には、土師器甕がある。

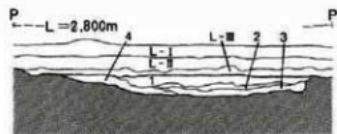
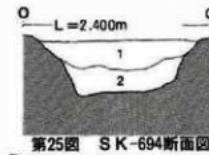
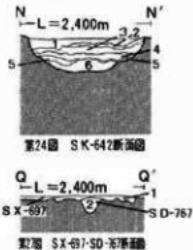
### (4) その他

#### 1. SX-697

調査区南端の地山面で検出した。調査区外に延びているため、構造全体の確認はできていない。検出した限りでは、歪んだ隅丸長方形をしている。確認した規模は、長さ約1.62m、上幅約85cm、底面幅約50cm、深さ約5cmである。SD-767と重複し、これよりも新しい。断面は、凹凸のある底面より急に立ち上がり、浅い皿状をしている。埋土は1層で、黒褐色粘土質土に灰白色火山灰がブロック状に混入している。出土遺物はない。

#### 2. SX-709

調査区南部の地山面で検出した。不定形な平面形をしている。規模は、長軸約4.3m、短軸約3.5m、深さ10~14cmである。SD-708と重複しており、これよりも新しい。断面は、平坦面のない凹凸の激しい底面から急に立ち上がっている。埋土は、黄褐色の地山の土をブロック状に含んでおり、人為的に埋め戻された様相を示している。遺物には、土師器甕・壺、須恵器杯がある。



0 1(m)

第24図 SK-642断面図

層	色	質	特徴
1	褐色(10YR5/1)	粘土シルト	白色粒子・炭化物粒を含む
2	褐色(10YR5/1)	粘土	マングン鉄を含む
3	褐色(10YR5/1)	粘土質土	酸化鉄を含む
4	褐色(10YR5/1)	粘土質土	酸化鉄を含む
5	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
6	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
7	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
8	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
9	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
10	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
11	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
12	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
13	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
14	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
15	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
16	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
17	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
18	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
19	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
20	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
21	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
22	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
23	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
24	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
25	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
26	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
27	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
28	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
29	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
30	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
31	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
32	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
33	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
34	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
35	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
36	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
37	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
38	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
39	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
40	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
41	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
42	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
43	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
44	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
45	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
46	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
47	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
48	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
49	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
50	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
51	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
52	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
53	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
54	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
55	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
56	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
57	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
58	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
59	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
60	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
61	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
62	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
63	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
64	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
65	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
66	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
67	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
68	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
69	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
70	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
71	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
72	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
73	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
74	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
75	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
76	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
77	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
78	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
79	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
80	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
81	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
82	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
83	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
84	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
85	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
86	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
87	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
88	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
89	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
90	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
91	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
92	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
93	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
94	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
95	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
96	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
97	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
98	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
99	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
100	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
101	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
102	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
103	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
104	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
105	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
106	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
107	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
108	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
109	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
110	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
111	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
112	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
113	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
114	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
115	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
116	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
117	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
118	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
119	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
120	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
121	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
122	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
123	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
124	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
125	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
126	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
127	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
128	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
129	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
130	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
131	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
132	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
133	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
134	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
135	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
136	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
137	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
138	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
139	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
140	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
141	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
142	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
143	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
144	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
145	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
146	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
147	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
148	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
149	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
150	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
151	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
152	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
153	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
154	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
155	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
156	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
157	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
158	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
159	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
160	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
161	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
162	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
163	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
164	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
165	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
166	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
167	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
168	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
169	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
170	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
171	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
172	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
173	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
174	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
175	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
176	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
177	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
178	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
179	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
180	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
181	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
182	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
183	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
184	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
185	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
186	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
187	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
188	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
189	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
190	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
191	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
192	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
193	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
194	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
195	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
196	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
197	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
198	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
199	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
200	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
201	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
202	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
203	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
204	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
205	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
206	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
207	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
208	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
209	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
210	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
211	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
212	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
213	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
214	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
215	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
216	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
217	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
218	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
219	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
220	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
221	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
222	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
223	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
224	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
225	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
226	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
227	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
228	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
229	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
230	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
231	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
232	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
233	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
234	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
235	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
236	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
237	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
238	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む
239	褐色(10YR5/1)	粘土	酸化鉄を含む

## (5) 遺構以外から出土した遺物

### L-I層

表土及びL-I層から出土した遺物には、土師器杯・高台付杯・甕・須恵器杯・甕・蓋・中世陶器、円盤状土製品、土製品（人形）、羽口、鉄滓、草食動物の齒がある。第29図2は須恵器杯の底部破片資料で、体部下端から底部周辺にかけて回転ヘラケズリを施しており、底部の切り離しは静止糸切りである。第29図1は土師器杯の口縁部資料で、内外面ともヘラミガキ・黒色処理を行っている。土師器甕の底部破片は、底部に木葉痕が残っていることから、非クロコ使用であることがわかる。第29図4の円盤状土製品は須恵器甕の体部を転用したもので、外面には平行叩き目がある。また内面の半分ほどの範囲にわたって光沢があり、薄黒色に変色しているのを観察できる。転用窯として使用されていた可能性がある。

### L-III層

L-III層から出土した遺物には、土師器杯・甕・瓶・須恵器杯・高台付杯・壺・甕・蓋・瓦、円盤状土製品、土製品（錘）、石製品（丸瓶）、縞文土器、鉄滓、雲母、草食動物の齒がある。第29図23は石製丸瓶の破片資料である。石材は暗赤褐色の碧玉で、少し渦った乳白色の玉髄が混じっている。第29図13は須恵器杯の底部破片資料で、手持ちヘラケズリを底面全面に施しており、切り離しは不明である。第29図14は高台付杯の底部破片資料で、体部下端は回転ヘラケズリが施されている。杯部と高台部の接合面となる底部周辺に、深さ約1mm程の2条の接合沈線を観察することができる。

この他遺構検出作業中に、土師器杯・鉢・甕・高杯・須恵器杯・壺・甕・羽口、鉄滓、草食動物の齒が出土した。第30図2は土師器甕の底部破片資料で、木葉痕を観察できる。胎土中には少量の海綿骨針が含まれている。

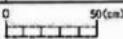
（註1）宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡 本文編』1982

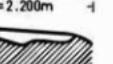
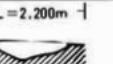
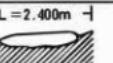
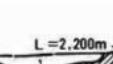
# 溝一覽表

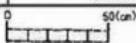
測量番号	断面	標出面	方向	長さ(m)	上幅(cm)	底面積(cm)	深さ(cm)	出土遺物	土層注記
SD-699	+L = 2.300m +	地山面	N-55°-W	5.4	30~60	20~30	5		黒褐色砂質土
SD-701	+L = 2.400m +	地山面	南北	3.8	40	24	10		1. 黒灰色粘質土
SD-702	+L = 2.300m +	地山面	南北	4.4	40	25	12		2. 黒灰色粘質土
SD-705	+L = 2.300m +	地山面	N-28°-W	5.1	30~40	15~20	2~6		黒褐色粘質土
SD-706	+L = 2.200m +	地山面	N-42°-W	8.5	36~56	24~52	3~7		黒褐色砂質土
SD-707	+L = 2.400m +	地山面	E-5°-N	7.3	65~85	35~65	2~7	土師器甕 土師器甌	黒褐色粘質土
SD-708	+L = 2.400m +	地山面	東西	5.7	30~50	22~28	5~10	土師器甕	黒褐色粘質土
SD-711	L = 2.400m +	地山面	E-40°-N	2.3	24~30	16~23	2~4		黒褐色粘質土
SD-712	L = 2.400m +	地山面	E-24°-N	1.6	10~16	6~12	2~3		黒褐色粘質土
SD-713	L = 2.500m +	地山面	E-14°-N	1.1	16~18	6~8	2~3		黒褐色粘質土
SD-714	L = 2.400m +	地山面	N-26°-W	1.4	18~32	12~20	4~6		1. 黒褐色砂質土 2. 黒褐色粘質土
SD-715	L = 2.300m +	地山面	N-35°-W	1.4	5~24	2~10	2~3		暗灰色砂質土

0 50(cm)

SD-716	L=2.300m 	地山面	E-32°-N	1.3	12~22	6~8	2~3		1. 黑褐色粘質土 2. *
SD-717	L=2.400m 	地山面	N-37°-E	1.6	10~18	6~10	2~5		1. 黑褐色粘質土 2. *
SD-718	L=2.400m 	地山面	E-41°-N	1.6	10~20	6~12	2~3		黑褐色砂質土
SD-719	L=2.300m 	地山面	N-8°-E	1.9	10~34	6~16	2~5		灰褐色砂質土
SD-720	L=2.300m 	地山面	N-8°-W	0.78	14~24	8~20	2~4		黑褐色砂質土
SD-721	L=2.400m 	地山面	N-40°-W	1.7	43~62	38~48	3~8		黑褐色粘質土
SD-722	L=2.300m 	地山面	W-45°-N	0.6	52~70	44~62	2~9		黑褐色粘質土
SD-725	L=2.300m 	地山面	N-33°-E	4.4	12~22	6~10	2~3		黑褐色粘質土
SD-727	L=2.400m 	地山面	東 西	3.3	20~34	12~25	5~10	土師器杯	褐色粘質土
SD-728	L=2.400m 	地山面	N-10°-W	4.6	35~120	25~35	5~15	土師器杯 土師器甕	1. 深褐色 2. 黑灰色粘質土 3. 灰灰色粘質土
SD-732	L=2.400m 	地山面	N-37°-W	8.7	76~110	62~88	4~10		黑色砂質土
SD-733	L=2.200m 	地山面	W-45°-N	4.8	34~104	24~64	5~9		黑褐色砂質土
SD-734	L=2.200m 	地山面	E-33°-N	1.3	12~22	6~8	2~3		黑褐色粘質土



SD-735		地山面	W-45°-N	0.9	24~28	12~16	2~4		黑色砂質土
SD-739		地山面	N-5°-E	1.9	50~65	25	10~15		褐色粘質土
SD-740		地山面	N-10°-E	3.4	45~55	10~25	10		褐色粘質土
SD-743		地山面	N-6°-E	3.9	20~38	10~14	4~5		黑褐色砂質土
SD-744		地山面	N-35°-E	4.7	28~60	15~34	4~6		黑褐色砂質土
SD-745		地山面	N-40°-E	2.6	32~40	12~22	4~6		黑褐色砂質土
SD-747		地山面	N-39°-E	3.1	42~60	22~40	5~7		黑褐色砂質土
SD-748		地山面	E-42°-N	2.9	23~42	12~26	2~7		黑褐色砂質土
SD-749		地山面	蛇行	32.5	76~108	38~70	8~32		1. 黑褐色砂質土 2. 黑褐色砂 3. 黑色砂質土 4. 黑褐色砂 5. 黑色砂質土
SD-750		地山面	E-45°-N	4.6	34~60	18~46	2~8		1. 黑褐色砂質土
SD-753		地山面	左カーブ	4.6	6~38	4~24	2~4		2. 黑色砂質土
SD-754		地山面	E-35°-N	4.8	16~34	6~18	4~8		黑褐色砂質土
SD-756		地山面	N-40°-W 真北に直す	4.9	6~48	3~18	3~12		黑褐色砂質土

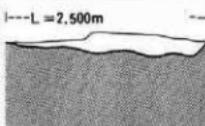
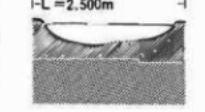
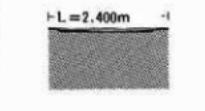
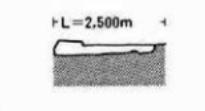
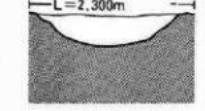
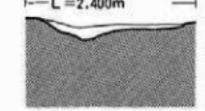


SD-757		地山面	E-20°-N	10	105~126	56~78	6~9		1. 黑褐色粘質土 2. *
SD-761		地山面	東 西	3.3	90~120	30~60	10~15		褐色灰色粘質土
SD-762		地山面	E-40°-N	1.3	40	25	10		黑褐色粘質土
SD-766		地山面	南 北	2.5	50~70	25~35	15		1. 灰褐色粘土 2. 黑褐色粘質土
SD-767		地山面	E-10°-S	1.1	25	10	15		1. 黑褐色粘質土 (SX-687褐色 火山灰含)
SD-768		地山面	W-40°-N	2.5	30~70	20~60	5		褐色灰色砂質土
SD-770		L-Ⅲ下	N-40°-E	3.5	25~35	15~35	10		褐色灰色粘質土
SD-771		L-Ⅲ下	右カーブ	7.6	35~45	25~30	10		褐色灰色粘質土
SD-772		L-Ⅲ下	W-40°-N	8.5	50~90	25~50	10	丸 瓦	1. 褐色灰色粘質土 2. 黑褐色粘質土

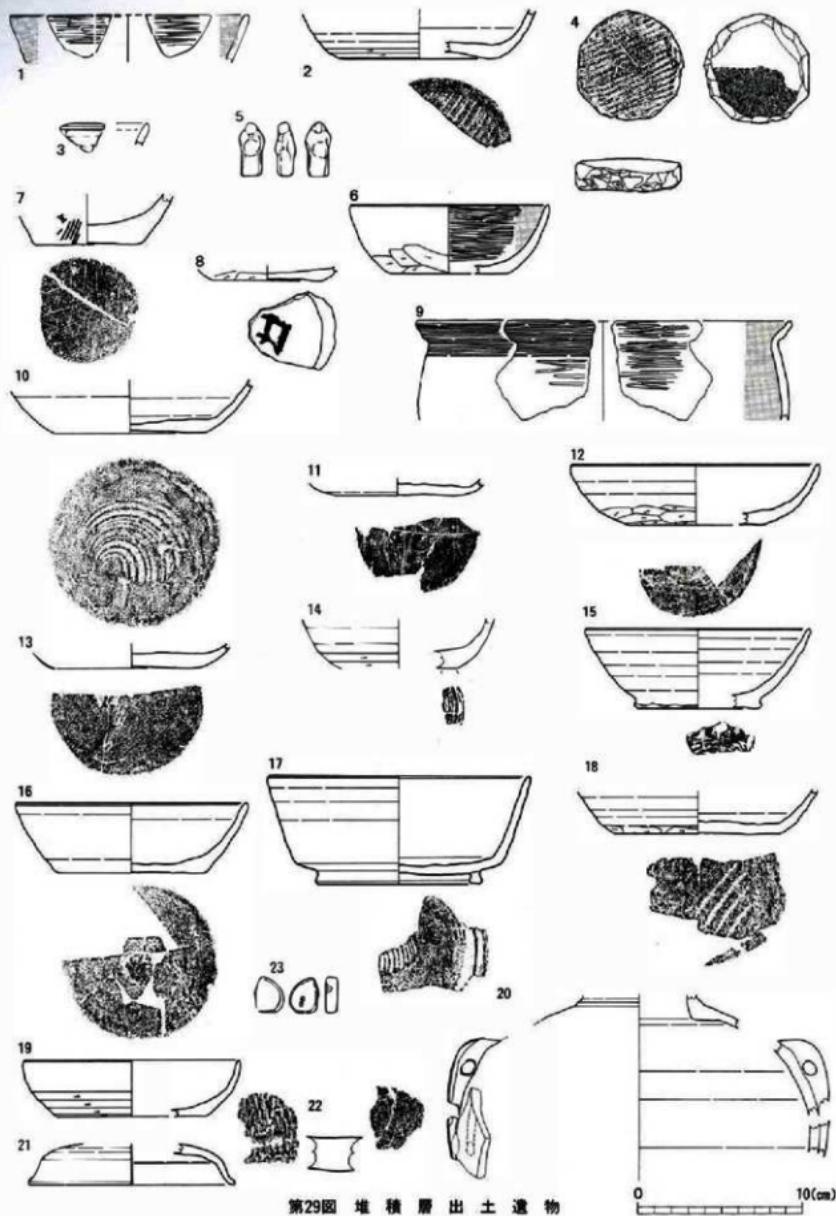
測量番号	断面	検出面	平面形	直徑	高さ	出土遺物	上層柱記	断面番号	断面	検出面	平面形	直徑	高さ	出土遺物	土層記号
SD-757		地山面	円形	47	21	なし	1. 黒褐色粘質土 2. 黑褐色粘質土	1-L=2,200m-4		地山面	円形	47	21	土質碎片	褐色灰色粘土

0 50(cm)

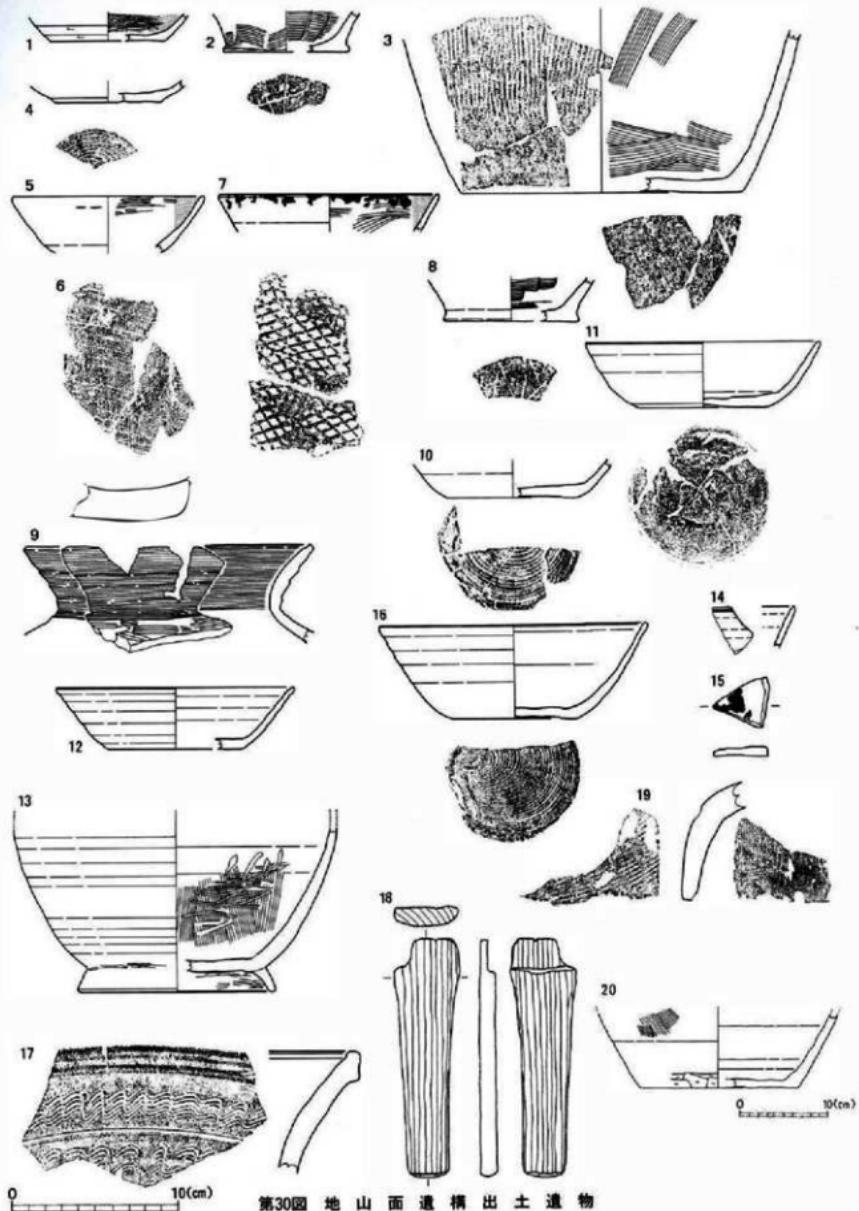
# 土 壤 一 覧 表

遺構番号	断面	検出面	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	出土遺物	土層注記
SK-643		地山面	隅丸長方形	1.7	0.7	10~15	モモの種子	褐色粘質土
SK-692		地山面	隅丸方形	1.35	1.35	50	土師器片 須恵器杯 鐵 津	灰色粘質土
SK-695		地山面	隅丸長方形	1	0.7	20		褐色粘質土
SK-696		地山面	梢円形	0.9	0.75	3		褐色粘質土
SK-700		地山面	隅丸方形	0.9	0.83	8		黒褐色砂質土
SK-737		L - III	円形	1.3	1.3	20~30	土師器杯 土師器甕	暗青灰色粘土 質 土
SK-746		地山面 L - III	梢円形	1.25	0.61	10~20		灰色粘質土

0 50(cm)



第29圖 堆積層出土遺物



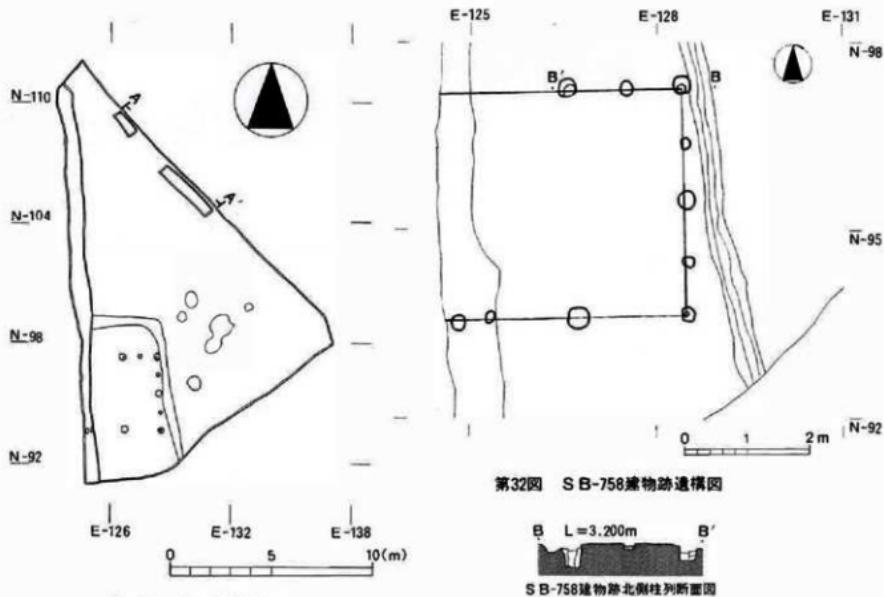
第30図 地山面遺構出土遺物

## 6. C地区

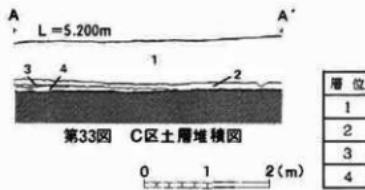
この地区は丘陵末端部にあたり、地山面の標高は、3.3mでその面から掘立柱建物跡と思われる1棟を発見した。

### ・SB-758掘立柱建物跡

調査南端部の地山面で、南北4間、東西3間及び2間の柱列を検出した。西側に建物がさらに延びる可能性があるため、ここでは東西複数建物と考えておきたい。建物の方向は東側柱列でみると、北で西に約1度傾く。桁行については、北側柱列が総長約1.81m以上、柱間が、西から約0.9m・約0.9mである。南側柱列は、総長約3.7m以上で、柱間は東から約1.7m・約1.4m・約0.5mである。梁行は東側柱列で総長3.58m、柱間は北から約0.9m・約0.9m・約1m・約0.8mである。柱穴掘り方は、ほぼ正方形で一辺14~33cm、深さは、確認面から2cmから36cmである。埋土は、黄褐色土を含む黒褐色土である。遺物は出土していない。



第31図 C区全体遺構図



層位	色調	土質	特徴
1	黒褐色(0.03/2)	砂質土	酸化鉄を含む
2	オリーブ褐色(0.01/1)	粘質土	酸化鉄を含む
3	黒褐色(0.03/2)	砂質土	地山粒、炭化物を含む
4	黒褐色(0.50/1)	粘質土	地山粒、酸化鉄を含む

#### 四 堆積層出土遺物觀察表

圖例一四 ( ) 指標定值

巴区 拉山雨 遗携出土遗物觀察表

## V. まとめ

ここでは、発見した主な遺構の年代について検討してみる。

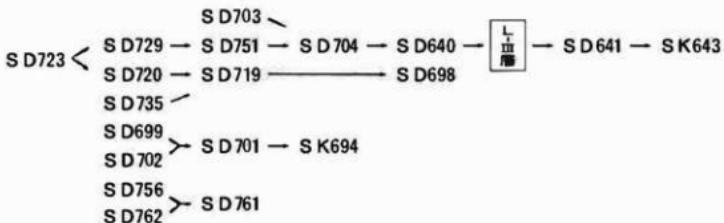
A

SD-631、SD-632、SD-633、SE-634について検討する。遺構面を覆っているⅠ-Ⅱ層については、灰白色火山灰をブロック状に含んでいることから、10世紀前半以降に堆積した層と考える。SD-631では、出土した土師器甕をみると、4点（第11図6、7、9、10）出土しているが、いずれも非クロクロ調整であり、小型甕の底部には木葉痕が残っている。また、器形については、体部最大径は上半部近くにあり、9にはヨコナデによって頸部に段がついている。須恵器杯（第11図5）をみると、底部が回転ヘラ切りの無調整であり、口径に対して底径が比較的大きめである。以上のような遺物の特徴は、多賀城跡で出土した8世紀末から9世紀前半の年代が与えられている土器と類似している。このことから、本溝が8世紀末から9世紀前半に機能していたと考えられる。SD-632からの出土遺物は、土師器杯（第11図11）1点のみである。この土師器杯は体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ調整を施したものである。また埋土に灰白色火山灰を含むことから、この溝の年代は、10世紀前半以前であったものと推定できる。SD-633は、遺物は出土しなかったが、埋土に灰白色火山灰が含まれていることから、10世紀前半以降には機能は停止していたものと思われる。SE-634は、遺物の出土がなかったが、重複関係よりSD-631よりも新しいも

のであり、L-II層に覆われていることから、9世紀前半から10世紀前半以前の遺構とみられる。

## B 区

先に、主な遺構の重複関係について整理する。



L-III層については、灰白色火山灰を含むL-II層に覆われていることから、おおむね10世紀前半頃を下限年代と考える。S D-641は、灰白色火山灰を埋土に含むS D-640より新しいこと、遺構埋土中に赤焼き土器が入っていたことから、10世紀前半以降に機能していたといえる。各遺構及び堆積層から出土した土師器の杯については、全てロクロ調整のものであることから8世紀後半以前には遺構年代は遡らないと考える。埋土に灰白色火山灰をブロック状に含む遺構（S D-640、S D-698、S X-687）については、10世紀前半以前に機能していたものと思われる。またS K-694は、遺構埋土中に中世陶器片が入っていたことから、中世以降に埋没したと考えられる。

L-III層の一部から、イネのプラントオパールが検出されたことから、この層が水田の可能性のあることを示している。

## C 区

掘立柱建物の年代については遺構内からは出土遺物が皆無であったため、決定することができなかった。また、遺構を覆う堆積層についても現代の盛土を施していた地域であり遺物も出土しなかった。このため、建物跡の年代については不明である。

1. 本調査では、全調査区で掘立柱建物1棟、堅穴住居1軒、溝60条、小溝16条、土壙10基、井戸1基、ピット2基を発見した。
2. 古代の遺構については、8世紀末から9世紀前半の年代のものを発見した。灰白色火山灰を埋土に含む遺構については、10世紀前半以前に機能していたものである。中世の遺構については、土壙を発見した。
3. L-III層から、イネのプラント・オパールが検出されたことで、この層について水田の可能性がある。

### <参考文献>

- 白鳥良一 「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要VII』 1980  
宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡第60次・61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』 1991 1992

# VI. 多賀城市、市川橋遺跡21次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

## 1.はじめに

植物残骸体は、ガラスの主成分である珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も固化する（プラント・オパール）。とて土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物残骸体）分析は、この固化物を直接土壤などから抽出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生、古環境の推定などに応用されている。

市川橋遺跡21次調査では、A地点とした砂層の一部に水田跡とされる土層が認められた。そこで、A地点では試作調査の検査を目的としてプラント・オパール分析を行なうことになった。

## 2. 試料

調査地点は、A地点である。分析試料は以下のとおりである。

A地点では、褐色灰土層よりNo.1、No.2、No.3の3点が採取された。

## 3. 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（津原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

1) 試料土の乾燥（105°C、24時間）、比重測定

2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ加温（直徑約40μm、約0.02g）全電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

3) 電気炉灰化による脱水操作

4) 粗骨粉による分級（30W・42KHz・10分間）

5) 沈降法による微粒子（20μm以下）洗浄、乾燥

6) 制入器（ハイキット）中に分散、プレパラート作成

7) 被覆、計数

被覆は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の倍率で微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が4000個以上になるまで行った。これは既にプレパラート1枚分の精緻に相当する。

被覆結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数）、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を兼ねて示す。また、おもな分類群について、この値に試料の权重（1.0g既定）と各植物の換算率（機動珪酸体）1個あたりの換算珪酸体重量（単位：10-5g）を乗じて、単位面積で厘米1cmあたりの換算珪酸体重量を算出した。換算珪酸体は、イネは赤穂（2.94、重実量1.03）、キビ族はヒエ（5.40）、ヨシ属はヨシ（6.31）、ウシクサ族はスキ（1.24）、タケ亜科については数種の平均値（0.48）を用いた（杉山・藤原、1987）。

## 4. 分析結果

試作調査の検査が主目的であるため、同定は、イネ、キビ族（ヒエなど）が含まれる）、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（スキやチガヤなどが含まれる）の主要な5分類群を中心に行なった。

検査された試料すべてについて分析を行なった結果、イネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科の各分類群のプラント・オパールが検出された。これらの分類群について定義を行なう。その結果を表1に示した。また、各分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。以下、各地点における検出状況を記す。

## 1.A地点

本地点では、イネ、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科のプラント・オパールが検出された。このうち、イネはすべての試料より検出された。No.1とNo.2では高い密度である。ヨシ属はNo.2とNo.3で検出されないがいずれも低い密度である。ウシクサ族はNo.1とNo.2で検出されたがいずれも低い密度である。タケ亜科はすべての試料より検出された。密度はいずれもやや低い値である。

## S. 審査

### （1）操作の可能性について

試作調査（市川橋）の検査や発見を行なう場合、仙台平野では、イネのプラント・オパールの密度1gあたりおよそ3,000個以上の密度で検出された場合に、そこで操作が行われている可能性が高いと判断している。また、プラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくく、密度が基準値に満たなくとも操作が行われていた可能性が高いと考えられる。以上のことを基準として、各地点ごとに操作の可能性について審査を行なった。

### 1) A地点

本地点では分析を行なった3ヶ所すべてにおいてイネのプラント・オパールが検出された。このうち、No.1とNo.2ではプラント・オパール密度が7,000/gと高めの値である。また、No.3でも3,000個/gと高い値である。したがって、本標準については操作であった可能性が高いと考えられる。

### （2）栽培の生産能率の推定

ここでは、耕作層の可操作性が高いと判断されたA地点の3試料をもとに、それぞれの地点における栽培の生産能率の算出を試みた。その結果、面積10a（1ha）あたりに換算すると、A地点では8.3tと推定された。当時の1年生開拓量を面積10aあたり100kgとし、基盤がすべて水田内に運搬されたと仮定すると、A地点では約80年耕作が行われていたと推定される。

なお、生産能率の算出には使用された平均厚さは、A地点では15cmである。

## 6. まとめ

市川橋遺跡第21次調査においてプラント・オパール分析を行い、操作の検査ならびに栽培の検査を行なった。

その結果、A地点ではすべての試料からイネのプラント・オパールが検出され、密度の平均値も5,000個/g以上と高いことから、本地点についても操作である可能性が高いと判断された。

## 文献

杉山真二・藤原宏志（1987）仙台市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山一古環境調査一、仙台市進歩調査会報告、10、P.281-298。

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（I）一枚種イネ栽培植物の珪酸体標本と定量分析法、考古学と自然科学、9、P.15-29。

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）一堀町・付木遺跡（夜ノ口）水田および耕層、日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*Oryza sativa L.*）生産能率の推定、考古学と自然科学、12、P.29-41。

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の検査－、考古学と自然科学、17、P.73-85。

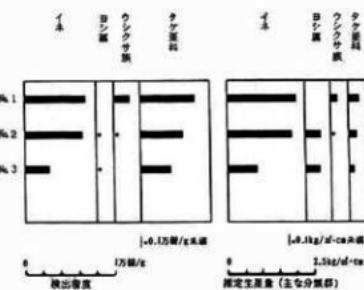


図1 A地点におけるプラント・オパール分析結果  
異なる分類群について表示。

表1 市川橋遺跡21次調査のプラント・オパール分析結果

採取深度 (単位: ×1000/g)	定量生産量 (単位: kg/d·ha)		
	A地点	イネ	キビ族
少	No.1 No.2 No.3	0.04 0.06 0.08	0.03 0.05 0.02
イネ	89 66 28	2.04 1.87 0.82	0.71 0.63 0.29
キビ族	7 7	0.45 0.44	0.35 0.38
ヨシ属	19 7	0.23 0.26	0.35 0.38
ウシクサ族(スキ等など)	19 7	0.23 0.26	0.35 0.38
タケ亜科(ヒエ等など)	82 45 25	0.35 0.38	0.35 0.38

A区全景  
(西侧より)



A区  
S D631全景  
(東側より)



A区  
S D632埋土  
堆積状況



A区 S D633埋土  
堆積状況



B区西側全景  
(北側より)



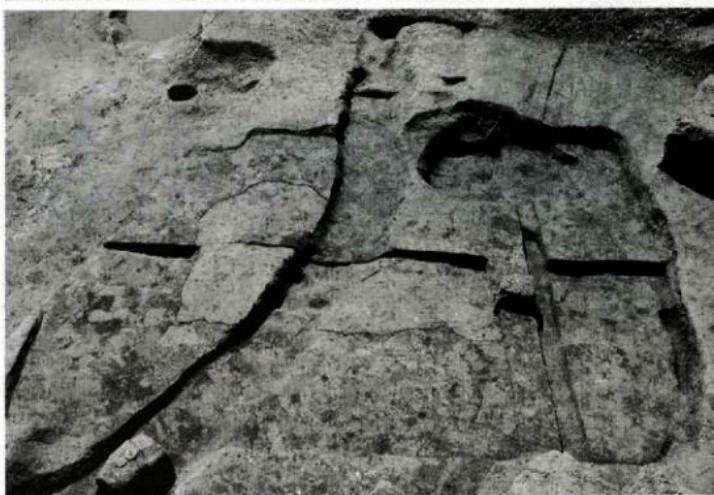
B区西側遺構  
掘り下げ状況  
(北側より)



B区東側  
S I 752住居跡  
検出状況  
(北西側より)



B区東側  
S I 752住居跡  
完掘状況  
(北西側より)



B区南壁  
基本層序  
および  
SK 760  
堆積状況

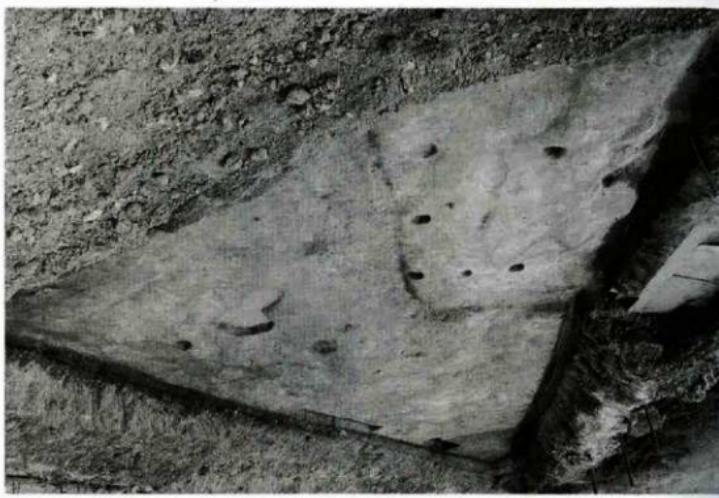


图版4

S D640浅切割  
C区全量  
(西侧Z向)

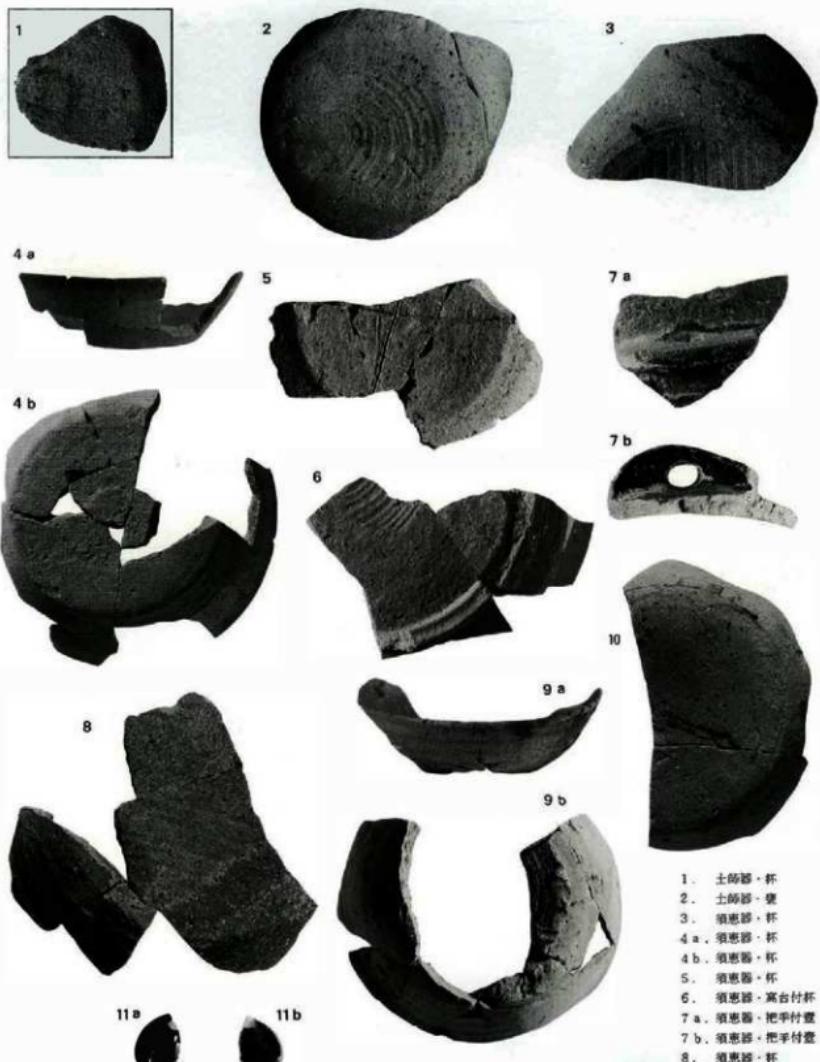


S D758浅切割  
B区全量  
(东侧Z向)



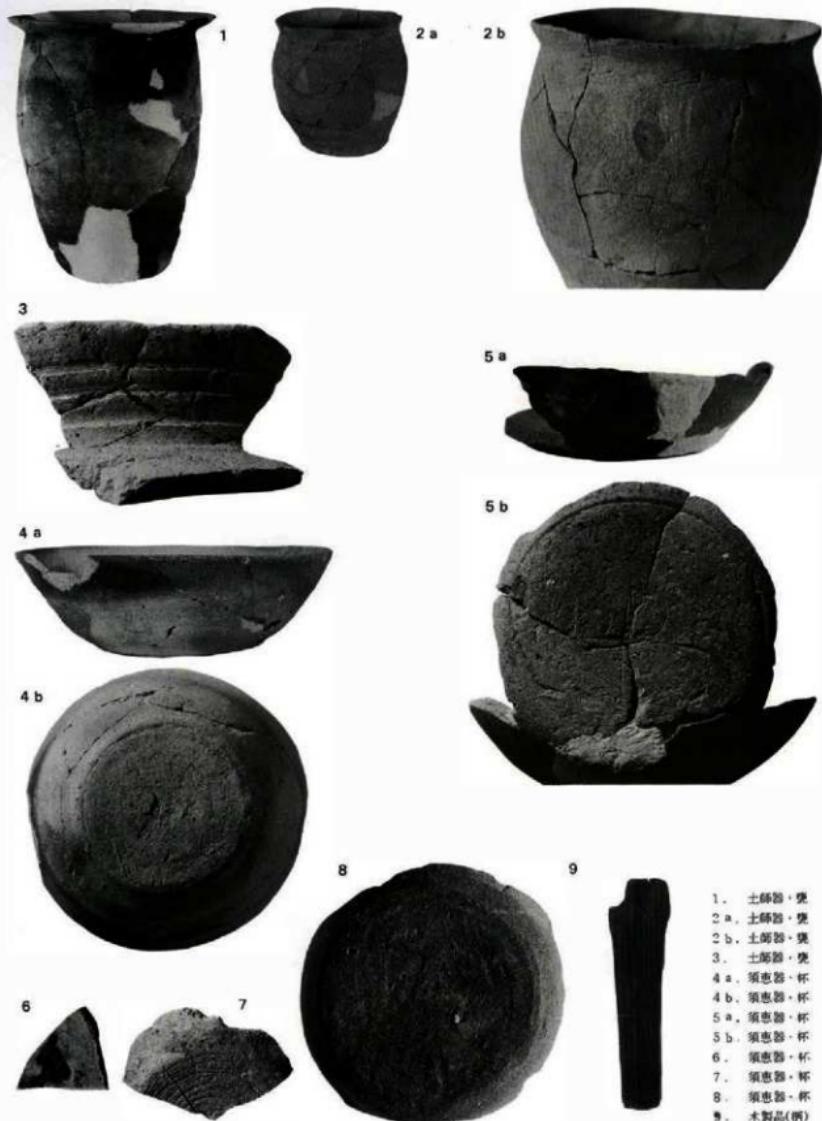
S D758浅切割  
(东侧Z向)





- 1. 土師器・杯
- 2. 土師器・甕
- 3. 須恵器・杯
- 4 a. 須恵器・杯
- 4 b. 須恵器・杯
- 5. 須恵器・杯
- 6. 須恵器・萬古付甕
- 7 a. 須恵器・把手付甕
- 7 b. 須恵器・把手付甕
- 8. 須恵器・杯
- 9. 須恵器・杯
- 10. 須恵器・杯
- 11 a. 丸鋸
- 11 b. 丸鋸

圖版 5 出 土 遺 物



圖版 6 出 土 遺 物

1. 土師器・甕
- 2 a. 土師器・甕
- 2 b. 土師器・甕
3. 土師器・甕
- 4 a. 須恵器・杯
- 4 b. 須恵器・杯
- 5 a. 須恵器・杯
- 5 b. 須恵器・杯
6. 須恵器・杯
7. 須恵器・杯
8. 須恵器・杯
9. 木製品(柄)

## 報告書抄録

ふりがな	いちかわばしいせき						
書名	市川橋遺跡						
副書名	第18次調査・第21次調査						
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第44集						
編著者名	高橋圭藏・伊藤 浩						
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒985 宮城県多賀城市中央二丁目27-1						
発行年月日	1997年3月25日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード						
市川橋 (第18次)	多賀城市 高崎字橋 ノ口地内	18	008	38°17'29"	140°59'40"	19950612 ↓ 19960831	1,234	道路建設
市川橋 (第21次)	多賀城市 高崎字橋 ノ口地内	18	008	38°17'31" 38°17'32"	140°59'43" 140°59'45"	19960617 ↓ 19960913	1,230	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
市川橋 (第18次)	集落	平安	溝井戸	須恵器 土師器				
市川橋 (第21次)	集落	平安	掘立柱建物 豊穴住居 溝土壙	須恵器 土師器				

多賀城市文化財調査報告書第44集

## 市川橋遺跡

第18次調査・第21次調査

1997年3月25日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
 発行 多賀城市中央二丁目27-1  
 電話 (022) 368-0134  
 印刷 富士印刷有限会社  
 多賀城市笠神五丁目15-28  
 電話 (022) 367-0157